

The Gallery Voice No.11

発行/画廊沖縄〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(098)834-6760/ART COMMUNICATION PAPER/1991.6.1

日はまた刃に昇る

製作をめぐる四つの断章

高橋 渉二

一。
風とおしのいいところ。日あたりのいいところを仕事場を選んだ。洋上に昇る朝日の輝き。また、月満ちるとき、海面にゆれてたどよう月光の絹糸。そんな入江の地で流木と出会った。流木もまた旅人だったから、肌と肌があう。浜辺にうちあげられ、はるかな疲れにずぶぬれた漂着者。あるいは、灼熱と孤独に渴ききった漂着者たちを、抱きかかえ、ひきずってきては小屋に泊めていた。

やがて、ついに、ノコギリ、オノ、ナタなどを持ちだし、高橋は旅人の身体を攻撃しはじめた。切り刻む行為が、風であるかのように。あるいはまた、骨でしかない旅人の、流浪の身にやかれた骨の最後にガスバーナーの火をあてていた。かくて旅人は、焼物にされ、見世物にされて画廊へと吊りあげられた。

二。
若き日曜画家は、毎日毎日絵をかきたいが、それができなないと悩む。飯は食えるし、絵の具も買える飽食の時代に酔いしれて、なにが悩みかナルシズム。会社務めを辞めようと思う。だが、「あなたの絵なんて、ただのマスターペーコンよ」と、皿を洗いながらの女房形気はいう。さらに、目を皿にしても、泡にまかれる自由とやらが、台所の流しのあのしたたかな日常の穴に、残飯ともども吸いこまれ始末されるのみであった。

いま皿、会社を辞めてどう鳴る。絵は

飢える。飯に吠える。仕官の道をすて、宮本村のタケゾウよろしく、風ふく草の枕を夢みても、アナクロと笑われるのが落ちだ。女房を斬る説得の刀はない。人はほとんど、木刀と木刀のやりとりでまんする。そんな処世というものを彼はよく知っていた。まいった！ごめん！ゆるせ！やはり、真剣はアブナイ。日曜画家であれば、糊口の道も絶たれまいと、木刀あるいは竹刀(しない)に、した。

三。
寝たい時に寝て、起きたい時に起きる。目ざめると、わが刀、版木刀の刃に真昼の陽光がふりそいでいた。夜を撤して彫った版木が生々しい。シナベニヤの合板の削りく



どうぞのま S. TAKAHASHI ed-10(25X20cm)

ずのなかで私は眠っていた。起床してどこへ行くわけでもない。(私は私の中へ)人はほとんど、どこかの務め先へと急いでいるのだろう。かつては、私も転々と職を変えながら渡ってきた。だが今は、わがままでありたいと思う。

自由人、と下世話にいうが、実は厳し

い。ある画家の「自由とは貧しいということだよ」といった真剣を、身にしみて理解できるようになった。金の山は目に見えるが、時間の川は見えない。言わずもがな、その川の貯金はできない。ならば、絵をかくためのたくさんの時間に、わがまま気ままでいいと思うのだ。

四。

版画のための下絵は充分楽しむ。作品化するのかどうかは別にして、かきただけかく、落がきに似る。餓鬼になる。島酒ガソリンなどで喉笛ならして走るエスキスの道は楽しい。そして、カリカチュア(戯画)というものを失いたくない。それから真剣を持つ。版木(朴、桂、シナベニヤ、リノリウム)を彫っていく刀は、牙であり舌である。風でもある。彫りすすんでいくと、四ツ足になっていて、犬、犬の目か、目が刀か、刀が目か、となる。切って、彫って、夜が明けて、日はまた刃に昇る。朝日に輝く水平線もまた、刀の刃にみえて美しい。(私の小屋の目は太平洋にむいている)また、このような製作のわがままを許してくれる大自然の時の輪に、感謝したい。

切磋琢磨というが、錆だらけでは、抜くことも切ることもできない。沖縄に住んで11年、錆というものが気になっていた。錆びたまま朽ちることはやさしい。竹みつでごまかすこともできるかもしれない。だが、今一度、刀を研ぐために島を出て行きたい。さようなら。くれぐれも錆には気をつけて。島のある種のみなさん、研ぎ忘れのないようご注意下さい。では、また、いつの日か。

(たかはし しょうじ・版画家)



日本セメント沖縄地区総代理店

株式会社 金城キク商会

本社 那覇市西1丁目1番28号 電話(098)866-1101(代表)
中部支店 沖縄市字松本1102番地 電話(098)937-0404(代表)

地元のビールが断然うまい。
最も新鮮
オリオンビール

沖縄の美術ジャーナリズムよどみへ!

山城 興勝 VS 宮里 健一

琉球新報社会部記者

沖縄タイムス学芸部記者

◎VOICE'S TALK
[A Talk About
Okinawan Art
Journalism]

美術とジャーナリズムの関わりは、今どうなっているのか。アートを触発し、美術認識をひろげる美術ジャーナリズムは、現代とどう戦うか。沖縄タイムス、琉球新報両紙の美術記者経験者に語ってもらった。

GV=ギャラリーボイス

マイナーな美術記者

GV 最近では美術館もできまし、画廊も増えた。美術家たちも本格的な美術、芸術を追求する時代になりつつあると思います。

そういう状況でジャーナリズムが果たす役割というのは、かなり重要だと思いますが、今日は美術記者経験者としてお話しして頂きます。

山城 1984年から5年半美術担当しました。新聞社では5年半も美術担当したのはいないでしょう。期間が長ければいいという問題でもないんだけど。

その間に僕は新聞記者として美術界にいい影響を与えたかどうかという自信もない訳です。

美術担当と並行して音楽を担当していたんですが、マイナーな部分なんです。新聞社のなかではエリートじゃない。

それで最初いやだったんだけど、ギャラリー通いしているうちに給料をもらいながら自分の趣味を増やしていきたくないかと考えるようになってから

やっていける気になったんですね。

そういうことで、美術のことは深く知らなくて、取材も展評もこちらから主体的に選んでという状況じゃなかったですね。どうかと言われたら素直にやるという具合だった。

宮里 ギャラリーで作品展等をやっている時に作家の紹介をするのは新聞社がやるのが当然だみたいな感じで、要するに記者の批評というはおかまいなしだというムードがあったんです。

だから今までやってきた取材というのとまったく違うので最初とまどったわけです。

自分で見てこれはいけるという事で記事をつくってきたと思うんだけど、ギャラリーの側から注文があって、それを受け入れるといいんですが、それを拒否すると美術に対する認識がない記者だと言われたりする。

展評なんかで言えば持ち上げているというか、本来の意味での作品批評になっていないような感じがします。

実際僕ら自身それを読み取る力があんまりなかったもんですから。

GV という事は美術担当の記者が主体的に取材をするという事がなかなかできなかったんですね。

山城 美術に対する勉強不足というのもあるし、これまでの美術担当記者というのは片手間でやっている。

絶えず入れ替わりがあって、美術の状況に対して意識の低い状態で終わっているから、こちらでも深く言えない。

頻繁に新聞社に入出入りする人が得をす

ような状況で、でもそういう人達はある意味では、ある程度の力があるから、こちらは言われた通りにやって紙面を賑わすみたいな感じがあるんですね。

GV 先程、新報の山城さんは美術記者というのは社内ではマイナーな部分だとおっしゃってましたけど、それはタイムスでも同じ事なんですか。

宮里 美術を担当している記者が美術の素養があるかといえば、殆どなかったんだと思う、僕を含めてね。

絵を見てその前で呆然としてね。美術を言葉にしなきゃいけないのに何を書けばいいかわかんないわけよね。

だから展評なんか持ってこられた時に掲載せざるを得ないというのはそういう状態だったと思うわけです。


沖縄の場合、美術のジャーナリズムというのが過去にはあったかどうか分からないけれど、僕が見てきた限りでは、まずあり得なかったんじゃないかと思う。


だからもし、それをつくっていくんだしたら美術を担当している記者自身が努力して勉強していくしか方法はないと感じます。

それと、さっき言ったマイナーな面、組織的にそれ程、力を入れてないんじゃないかということ。

ただタイムスの場合は沖展をずっとひっぱってきたということは、ありますけど。

GV そういった意味では両紙とも美術に関してはかなりわかりづらいことがあったと。

 **バームヒルズゴルフリゾート**

 **高倉コーポレーション**

代表取締役会長 高倉 文子
代表取締役社長 高倉 幸一

〒900 沖縄県那覇市久茂地3-29-56 Tel.098-861-7621

別かとうこれから



琉球石油株式会社

沖縄県那覇市松山2丁目27番1号 ☎(098)868-2131

言い方は悪いですけど軽くあしらってきたというか、そんなに深入りはしないで社会的な状況を取材するという位に留めているんですね。

宮里 学芸部の記者というのはいろんな事をやるんですね。

美術だけをやればいいんだという事でもないし、文学も芸能も他に評論みたいなものもあれば、社会状況とも対応しながら文化的な要素を紙面に掲載していくという仕事なんですね。

だからひとりの美術記者を養成していくようなことはないですね。

山城 主体的な美術ジャーナリズムに入り込めないというのは、美術担当をしていて絶えずまとわりつく悩みなんです。これがいつまでもできないから、美術担当というのは新聞社のなかで認知されないわけ。根本的に問題は、その辺だと思う。

GV つまり、美術記者でぞっこん美術の世界に足を踏み込むような人がこれまで出てこなかったという事ですか。

山城 人という事じゃないんです。

宮里 それは、ある種の蓄積みたいながないという事ですよ。

何か物を作り出したり人を育てるためには、ある程度のこれまでの蓄積みたいなのが必要だと思う。

その蓄積というのが全部流されてしまっているわけよね。

人が替わればまた新しくなって初めに戻ってしまう。せっかくここまで来たんだけど、他の人に替わってしまって、来た人はまたゼロから始めて、そんなふうな感じでやっているんです。

ある程度蓄積があつて美術をきちんと観て、自分の方から発信していく場面がなかなかつくれないわけね。

GV 山城さんが5年半もやったというのは、大事なことですね。大体、半年や1年で担当がクルクル替わりますでしょう。こんなに簡単に担当が替わっちゃったら、それこそそういう美術ジャーナルを見つめるという気力も時間も無くなるんじゃないですか？

宮里 ただ新聞記者の場合は養成の仕方というのがあから、あっちもこっちも行かせて、オールラウンドプレーヤーみたいのをつくって、それから専門部所に張りつけていって育てていくという事も

必要なんですね。

批評は成り立つか

山城 以前沖縄タイムスでタイトルは、はっきり覚えてないんだけど、沖縄の美術界に批評は成り立つかみたいな連載を7~8回やってた事があります。

確かに批評ができるかという状態を今だに引きずっているんです。こてんぱんに批判されたら取材もボイコットに近い状態になりかねないし、なかなかそれを切り出せない。

書く側が下手な書き方かもしれないけども、指摘されたらワジワジーして取材

のか。そんなことが感じられるんだけど。**宮里** 美術記者を育てるというのもひとつのやり方だし、それから周りの人たちを起用していくのもひとつの方法だと思うんです。

その時に新聞社がきちんとした指標を持っているんだったら、それをひとつの軸として美術評論そのものが発展して来たと思うんだけど。

そういった軸になるものが、なかったような気がするんだよね。どっちかという紙上で喧嘩をするような感じじゃなかったかな、どうなんだろう。

宮里 作品を的確に紹介していくというのはひとつの技術だと思うんですけど、それがまだ新聞のなかでは出来てないよ



山城 興勝(左) 宮里 健一(右)

も受付ないというのも大人げないと思うんですよ。

その辺お互い意見を言い合つて前向きな状態、批判が成り立つような状態に持っていけないとね。いつまでも私的な向上というのは出来ないと思うんです。

GV そうですね。沖縄で美術評論は成り立つかという事が10年位前、喧々諤々ありましたよね。

あれ以来、混迷に陥ってマチブツテしまつて殆ど真剣な美術評論らしい事が新聞に出てこなくなったような気はするんですよ。

それから新聞社の方でも匙を投げ出したのか。何かひとつのピリオドをうった

ような気がするんですよ。気がするんではなくて出来てないんですね。

だから一番どういう表現の仕方がその作品をよく紹介できているのか、それをまだつかめてない。

作品を専門的な立場からみて批評していくというような学芸部のキュレーターみたいな人たちが沖縄にあんまりいないでしょう。

美術評論のパイロット的な役割を演じているような人たちがこれまで何人かいたと思うんだけど、いろんなしがらみみたいなのを離れて客観的にやっていくというような事が必要ではないだろうか、そういう人たちというのが今後、必要に



Kentucky Fried Chicken

株式会社 リウエン商事
代表取締役社長 宮城 義明

〒901-21 沖縄県浦添市宇勢理客556番地 TEL.(098)875-2168

国家試験合格者輩出-No.1の総合コンピュータ専門学校

専修学校 **CSCコンピューター学院**

本校校 号901 沖縄県浦添市山下町1103-1 電話098(659)0745
中部校 号904 沖縄県浦添市宇勢11-1-10 電話098(639)1031

なってくるんじゃないかなと思うんだけど。

美術ジャーナリズムは、今

山城 新聞社が美術関係の記事を扱うケースとしてはね、ここ数年来の絵が財テクのひとつの方法だということ、今はやりのメセナの件、あるいは企業が54億で絵を買取った、じゃこの絵を覗いてみようとか、絵に興味のない人も関心を示す。

新聞社はそれを書かないといけない。



山城 興勝

そういう社会現象として絵に関わっているわけです。

山城 例えば目の前に絵があって、じっくり観てその感性みたいなものを見抜くという作業をやっていないわけ、できないわけですね。

その辺がさっきいったマイナーな部分だと思う。

GV これは何がそうさせているんですか、やはり新報もそうですか。

山城 そうだね。

宮里 社会とのつながりみたいのが見えてこないというね。

GV 見えてこない？これは記者が見えてこないのですか？社会の中で見えてこないのですか？

宮里 大衆が見えてこないんじゃないかな。美術と社会との結びつきがね。

さっき言ったみたいに美術は個人の世界じゃないかというのがある。

新聞の紙面というのはどっちかという社会的な状況を取り込んで行くわけだから。

山城 新聞は美術の社会現象面を追うも

のだから、作品の持っている内面性には入っていけない。

そのためにいつまでも現象面だけを追うような格好で美術記者は存在している感じじゃないかと思う。

GV じゃ深入りして本質的なことに光を当てることは出来ないんですか。

山城 出来ないというよりか、それは機動力の問題がある。

実際、機動力はあっても記者の問題があるし、感性の問題もある。

GV 例えば今沖縄の美術はどこに向かっているだろうかという部分でね、とっかかりのテーマは、いろいろありますよね。

いろいろ美術に関心のある人、批評をやっている人たちをかき集めていろいろ意見を聞いて交流を持つ事も重要だと思うんですよ。

山城 それが今、やりにくい部分があるんですよ。見えないという部分、分からないという部分、だから

僕らも何か企画やろうとしてもね、どういふ企画をやればいいのかと思うんですよ。

だから、そのことは、それ以前の問題だと思うんですよ。大体、新聞社が美術に関する座談会を組む場合は人選でもめるんですよ。

こちらが、主体的に人選をやりたいのに、この人呼んだらあっちが怒るんじゃないかとかがあるわけですよ。記者のワカランヌーが、勝手に選んでおかしいという考え方をもっている人もいて。

その辺も、新聞社が主体的に仕掛けていくことが出来ない原因でもあるわけです。

GV しかし、それは残念ですね。

宮里 でもそれは必要だし、やっぱりやっつけていかなければと思う。

山城 多少、新聞社が強引だなどと思われるくらいのことを辛抱することも必要だと思うね。

GV いや、それは辛抱してくれるんじゃないですか。

山城 いや、それがそうでもないんです

よ。

宮里 そのやりづらさは確かにある。仕掛ける側にちゃんとした企画を持っていれば出来るんだろうけど、正直言うとまだ、そこまではやって行こうという気持ちがないんですよ。

美術ジャーナリズムよ、どこへ行く！

GV ここまでお話ししてきましたけどいろんな問題があつて、なかなか突破口がひらけない感じですね。

依然としてそういうマチブツタ問題は続くんでしょうかね。

山城 先程言ったように新聞社は社会現象を追うという立場にあるものだから、美術の意識が社会現象として高まっていけば新聞社も自ずからついて行くという感じなんだ。

だから新聞社の側からリードしていくというのは今の状況では難しいね。

GV ちょっと淋しいことだな。

僕らとしては、既に社会状況は出来上がっていると思うし、今一番マスコミ本来の力を発揮してほしい時期だと思えます。新聞社はかなり醒めてますね。

山城 新聞社としては出てきた文化的な芽をいち早くつかんで、それを発展させる事は出来るわけですが、新聞社自らが文化を創るというのは難しいと思う。

GV 文化を創る事は難しいかも知れないけど、文化が生まれるような仕掛けをする事は出来るんじゃないですか。

せめて文化欄にね、本当のジャーナリズムの豊かさ素晴らしさを投げ掛けたり触発したりね。沖縄の近未来の美術を語ったり、地域に住む人たちの美術文化とかね。そういうのと密着した精神性みたいなこととか、それを読めるのは文化欄でしかないんじゃないですか。

そこでは広告にも何も頼へつらう事もない。それこそもつとどンドン仕掛けて行って、そういう芸術文化を育てて行かないきゃ。

宮里 ただ、なかなか内部ではいいものがあつたとしても見えない部分があるわけですよ。

沖縄を発見してきたのは殆どヤマトの方ですよ。その人たちが発見してそれはいいもんだよという事で、沖縄も、あ



沖縄で生まれた郷土の信販会社

沖縄信販

〒900 那覇市松山2-3-10 ☎(098)851-1123代

アートライフは、OCクレジットで。

“専門画材の店”

CULTURE PLAZA



株式会社みつや書店

〒902 沖縄県那覇市壺屋1-1-3 ☎(098)863-1650代

あ確かにいいもんだという事でみんながそれに向かって走り始めるみたいな状況がずっと続いていると思う。

山城 沖縄の美術状況というのは僕はそれがあると思う。陶芸なんかもそうだ。

宮里 沖縄のなかから出して行かなければ説得力もないと思う。それをいかに芸術として見つめて変化させて行くのか。そこら辺が作業のポイントだと思いますし、そして現代とどう結べるかを見せてくれる作品というのは、そんなに多くはないと思うけど、引っ張って行く力は必要ですね。

GV そこら辺はやっぱり交通整理する評論が出てこないとだめですよ。

マスコミは本当の評論家を育てるべきですね。

山城 19世紀くらいまでは、強力な思想性に基づいて芸術も反映して行ったでしょう。

20世紀に入ってニヒリズムみたいのが出て、ああやっても駄目これも駄目、手を変え品を変えやっているうちにわけが解らなくなる。そういうのが絶え間なく続いているんじゃないかと思う。

それは取材する側もそういうのがあるんじゃないかと思うんです。だから、上原(GV)さんなんか前向きな回答を求めても答えられない、そんな感じ。

現代社会のそういう部分が芸術にも反映して行って、それが表現する側にとってもあるし、新聞社は社会現象をとらえるような役割で出てきているんです。そこから文化を創るといのは、やっぱり難しいんじゃないかね。出てきたものをつかんで世の中に出していくのはできるけどね。

今みたいに新聞に対する批判が強い時代には余計に難しいね。

GV つまり問題は美術環境づくりというのが、ものが先になるのか或いは触発するジャーナリズムが先になるのかという観点ですよ。

僕としてはそういう環境をつくるのもジャーナリズムの触発がない限りいい状態に進んで行けないと思います。

山城 僕はこうだと思うんですよ。

例えば今いろんなジャンルがあるでしょう。美術も音楽も、それぞれが接点がある。ニュートラル地帯があって、そこがレベルアップしないと美術も音楽もい

ろんなジャンルでよくなると思う。

音楽も美術もそれだけで独立はしてない。例えば抽象画でもジャズ性を取り入れた絵というのがあられるわけでしょう。そういう絵でありながら音楽とまたがっているのがある。舞台芸術なんかもそうでしょう。

だからその辺で新聞社は社会現象を追って行くという格好になっていくわけですよ。

全ての芸術の中心になる部分があってこれを追わない限りいつまでも良くならないという感じはあると思うんです。

宮里 それをやって

いくなかで今の沖縄

の美術界というのは何処に向かっているかというのが見えてくると思う。そしてそこからいろいろ仕掛けて行くという要素が出てくると思う訳です。

今やっぱりそこら辺までは考えられるけど、だけど位置付けみたいなのが僕らの中にはまだないわけね。だから思い切って仕掛けが出来ない。

GV 宮里さんから今、提案めいたお話があったけど、実際そのテーマに向かって作業が新聞社の内部でされてるか、或いはそういう話し合いがされているかという事はどうなんでしょう。

宮里 新聞社の場合にはそこまでは行かないと思うんだよね。もつともつと先にやるべき事がいっぱいあるという事で。

GV とすると、こういう事が出来るというのは、かなり遠い先の話ですかね。

山城 とにかくやりづらいことが、あるんです。例えば沖縄の美術の特性を出そうとする場合に、ちゃんとした美術史を書いている人がいないでしょ。おおよそでも、ひとつの流れとして捉えてないもんだから、沖縄の美術を理解しようとする場合に入りにくいわけです。

GV という事は新聞社の美術ジャーナリズムの分野においてね、近代の沖縄における美術の流れ、あるいは近代前の沖縄の伝統的な王朝時代の美術の歴史にかなり未消化な部分があって非常に未開拓な分野だということですね。

どうもここまで話をお伺いするとね、美術ジャーナル或いは美術研究、美術評論の弱体ぶりを披露したに留まったような感じが僕はしないでもないですよ。

さあ、そこで現代はまさに美術の時代、21世紀はアートの時代と言われる最中なんですけど。なんとか突破口を見いだし



宮里 健一

て行くには、どういう事が必要なんですかね。提言なりを聞かせて下さい。

山城 二つの要素があると思う。

ひとつは底辺を広げる為にいろんな環境の問題があるし、発表する側がもう少し慎重に度量のあるものを発表してほしいというのがある。

それから沖縄の美術の流れを研究家が続けて記録に残してないというのがあるものだから、沖縄の美術が主体性を持って、しっかりしたものとして発展させていく事が出来ない。

もうひとつは、最初に言った批判が成り立たないという事ですね。

GV どうも僕はそういうのも大きな疑問が残るんだけど、どうしてもジャーナリズムには、社会的な使命みたいのが聞かれると思うんですね。

やっぱり仕掛ける部分もあって、社会を見抜く目とか知性とかというのはジャーナリストの本分であるでしょうし。文化部の美術に関わる人たちが率先して仕掛ける必要があるだろうという気がするんですよ。

これは誰もやらないし、やっぱり社会の公器である活字の新聞がやるべきであると思います。

どうも長い間、ありがとうございました。今後のご活躍を期待しています。

ダイキン冷暖房機特約販売店/那覇市給水・排水設備工事指定店



南西空調設備株式会社

〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(098)834-7831(代) FAX(098)834-5348

國場組グループ

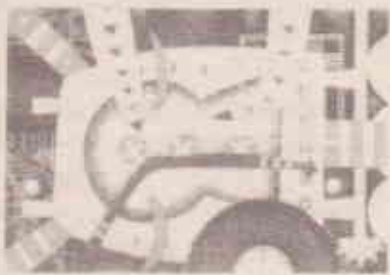
國 和 會

会 長 國 場 幸 昇

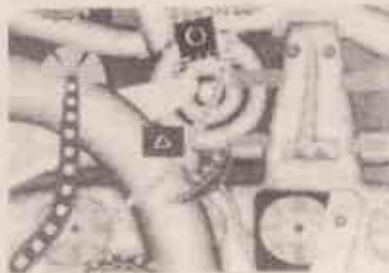
《幸地学リトグラフ第2シリーズ(3点)7月に発表!!》

最近の幸地は精力的に作品を発表し続けている。7月のオリジナルリトに続き、10月に6点のマルチプルブロンズを発表する予定である。5月に米国、ワシントンD.Cの個展も好評の内に終えたばかり、10月のパリの個展に向けて、制作中とのこと。

パリ・ムーロ工房作、クロードルマン
ギャラリー発表3点セットシリーズ。
◇サイズ 56x76cm
◇紙種 アルシス
◇エディション 120枚
※画廊沖繩ではただ今注文を
受けたまわっております。
(1)X(2)X(3)とも各15万円
3点セット35万円(シート価格)



(2)La totalite de La Valeur Spirituelle



(1)ouverture Continuelle de son esprit



(3)La dimension Spirituelle

GALLERY WORK-II

長年会予定

□6月3日~15日 永原 達郎展

□7月15日~27日 田原 幸浩展

□8月5日~17日 渡名喜元俊展

ギャラリーマン

川満先生とパレット久茂地

最近、沖縄TV番組の「お笑いポーポー」がおもしろい。その中の一人に宮古グチをコミカルに取り入れて笑わせてくれる人物が特に好きである。いかにも土建屋のおじさん風のいでたちで現れ、観客に「自分を川満先生と呼びなさい」と強制的に言わすのである。そのかわり「あんた達に宮古の言葉を教えようね〜。」と笑いの中で教えてくれるのである。最初は「アーブバ」「ブ」は下唇を少し噛むのがコツらしい。次に「タンディガタンディ」ほかにもいろいろ教えてくれたが忘れてしまった。とにかく彼の身振り手

振りがコミカルで笑いを誘う。開場全体がローカル一色になり、心をなごやかにしてくれる。そんな想いをしながらウチナーだなあと実感させてくれた川満先生に「タンディガタンディ」(ありがとう)その翌日、パレット久茂地が華々しくオープンした。巨大建築の周りは整備され、デパートの中に足を踏み入れれば、洗練されたディスプレイが並び、さらに高級ブランドの品々を扱う店員も品よく対応してくれる。つい、お客まで気取っている様にみえるからおもしろい。そんな空間にいと、ふと小野田さんの心境ではないが、「ここ沖縄?」と言ってみたくなる。川満先生とパレットはどうしてもイメージが合わないのである。しかし、ダ

* 額縁の専門店 *

合資会社 前田額装商会

〒900 那覇市松尾2-7-29 ☎(098)867-4811 FAX(098)861-0367



絵画(油彩・水彩・版画)の専門店

画廊沖繩

〒900 沖縄県那覇市泉崎2-2-3 ☎(098)334-5792

イナハや平和通りだとギャップがない。ある日私は、パレット久茂地に彼がいたらなどと想像してしまい、一人おかしくなった。「あーウチナーンチュヤッサー」と「本当に沖縄!」とがミスマッチしながら交差して、不思議なおかしさをこの沖縄で展開すると思うが、ウチナーらしさがなくなった時は、ナイチャーになる練習を始めようと思う。(豊平 秀樹)

絵と額

ある展示会で、じつと絵を見ていた人が、「これはいいですね」「この額はいくらですか?」と画家にたずねていた。私はつい失礼な人が世の中には居るもののだと思った。確かに額がやたらと目立つ展示会がある事がある。これは絵と額のバランスや色や形、素材がマッチしてないのだ。絵と額の関係は微妙で難しい。二者の関係が調和してはじめて、絵の豊かな内容が引き出される。このことは人間と衣服の関係にも似ている。ファッションの世界で言うと、あるイメージを持った衣服と個性を持った人体の関係と言えるだろう。衣服の表現力で、その人間の持つ個性や内面が調和する事によって、輝きを放つという事だ。しかし又、米国で見たゴッホやゴーギャンはただの木枠の額に入れられただけである。でもやはり、いい絵はいいのである。これなどはさしずめセンスのある人(内容ある人)は何を着てもさまになる人の事だろう。いずれにしろ絵と額の関係は微妙で、神経を使うものである。その事は展示会をする作家にも言える事であるが、「美学」のみならず「美額」についても考えて欲しい事である。(長嶺 豊)

編集デスク

11年も住み親しんだ沖縄を離れる高橋涉二さん、このまま居すわり続けるとアカまみれになって病にかかりそうだと云う。一段と深みを増した彼の版面には大いに期待している一人である。北へ帰っても頑張っ欲しい。

沖縄の美術ジャーナリズムが健康かどうか、興味のあるところ。経営主軸型へ移行した今日のマスコミの紙面づくりは、文化、学芸欄にも深く根をおろしているようだ。せめて5年ぐらいのスパンで美術担当記者を配してくれたら。(上)